

講評

武庫川女子大学 言語文化研究所 所長 佐竹 秀雄

A. 教育実践部門

国語教育・日本語教育における筆順指導の実態及び意識に関する研究

小中学校および日本語教育機関における筆順指導・筆順学習に関する実態と意識について、アンケート調査をもとに分析したものである。学習者約1,050人、指導者約280人の大規模な調査である。各設問についての結果を整理して記述し、最後にまとめとして「正しい筆順＝絶対的なもの」という認識の存在に対する問題点を提示している。

小学校、中学校、日本語教育機関の3領域について、それぞれ学習者と指導者に分けて集計を行って分析しているが、その詳細な記述は高く評価されるものである。また、筆順指導に関する指導者の認識不足の問題も重要な指摘である。

ただ、筆順指導の実態と言いながら、どれぐらいの時間、どのように指導されたかについては全く触れられていない。指導の有無にとどまっている点には疑問が残る。また、指摘も、筆順指導そのものの必要性や効果に問題があるのか、筆順指導の方法のあり方がよくないのかについてあいまいである。その点が惜しまれる。

漢字学習に意欲的に取り組み、確かな漢字能力を身につけた児童の育成

—「おおやま漢字検定」を生かした漢字学習システムの構築を通して（1年次）—

児童が漢字学習に主体的に取り組むことができるシステムの構築を目指す教育実践の報告である。実践校独自の「おおやま漢字検定」を生かそうとするところに特徴があるという。

結果の報告によれば、7月の調査よりも2月の調査結果のほうが多くの点で好ましい効果が見られたということである。また、児童だけでなく、教師の漢字指導の意識が変化した点でも大きな効果があったと述べられている。

これらは、児童たちが漢字学習に意欲的に取り組むようになった結果であろう。このような効果をもたらした全校挙げての漢字指導の取り組みの成果だと思われる。しかし、それならば、「漢字学習システム」のどの部分が効果的だったのかを明らかにしてほしかった。例えば「授業外の学習」や「家庭学習」などのどれがどの程度有効であったかが分かれば、他校においても、今後の漢字指導に大いに役立つと思われる。また、「おおやま漢字検定」が完成せず、それを生かした漢字学習システムが構築されなかった点は大いに残念である。

ニューカマーの中学生・高校生の基礎的学習能力養成のための日本語教材の開発と試行

高校での学習に必要な日本語能力がまだ獲得されていない中・高生のための日本語教材を開発し、実際に授業をしようとした計画の報告である。教材は開発されたが、授業の実践は東日本大震災の影響で計画通りにはいかなかったという。

予期せぬ事情で計画通りにいかなかったことは致し方ないことである。そうした悪条件の中でも、教材開発に関しては「練習ノート」が作成されている。ただ、その開発について「高校生にわかりやすい話題、身近な話題を中心に編集」とは述べられているものの、詳しいことは述べられていない。せっかく苦心されたのであろうから、これまでの教材との違いなど、開発の中核になることを説明してほしかった。

また、質問紙調査の結果についても、「6. 考察」で要領よくまとめられているが、その基になった回答の意見をもう少し紹介してあってもよかった。実際のナマの声は、日本語教育の現場にいる人に、抽象的なまとめ以上に強く響くと思われるからである。

日本語能力を高めるための小学校低学年配当漢字指導法

—漢字学習入門者の意欲を大切にしたい指導法の研究—

小学校低学年児童に漢字を学習させるために開発した独自の教材を使った実践報告である。教材の大きな特徴として「音訓を同時に教える」「カードで音が聞ける」が挙げられる。

報告書では実践記録として3人の児童の例が述べられている。3人はスペイン語が母語の児童、自閉症児、知的障害のある児童である。実践の対象者はこの3人だけなのだろうか。3人に効果があったのは分かったが、3人以外の多数を占める児童たちの結果については言及がない。せっかくの指導法について一般的効果の報告がないのは残念である。

ここで指摘されていて興味深かったのは、「5 聞いて、読んで、書いて、漢字習得」の章である。筆者が気づいたこととして、音読効果、音訓セットの学習効果について言及されている。重要な指摘だと思うのだが、その根拠が弱いのが惜しい。実践を通して、どのような効果が上がったかについて客観的なデータとともに示されていれば、もっと説得力があっただろう。

高校2年生を対象とした国語科新単元学習の構築 —古典を深めて現代につなげる—

古典分野の授業改善を目指し、古典の時代を理解させるために、ビジュアル資料や模型を利用し、さらには、生徒自身に模型を作る体験をさせるなどの手法をとった教育実践の報告である。その結果、生徒の関心を高めることに効果があったと述べられている。

この方法で、古典に対する生徒の関心が高まったことは容易に想像できる。また、関心によって、古典への理解が深まり成績が上昇した可能性も十分あると思われる。その関心を高めるために、教員自身が模型やDVDを制作するなどの準備作業をされた苦勞も推測できた。

活字以外のものを活用して、活字の世界に導くという手法は理解できるが、それは古典学習のどの段階まで効果的なのであろうか。導入段階で終わってしまうということはないのか。その後、生徒たちは自立的に古典に親しんでくれるのであろうか。この報告書からは、生徒たちが授業に熱心に取り組んでいるようすは読み取れた。しかし、筆者の目指す「考えを深める」機会として機能したのかについてはやや疑問が残った。

B. 活動費助成部門

JSL漢字学習研究会の運営報告

漢字学習・漢字指導にかかわる問題を研究・議論する研究会の報告である。活動助成によって、講演会開催の拡充、広報パンフレットの作成、ホームページの改訂が可能になったと述べられている。

活動助成が研究会にとって必要なことに使われ、概ね有効に活用されたことは理解できた。ただ、その効果が研究会に対する恩恵にとどまらず、広く漢字学習・漢字指導の世界にどのような意味や効果をもたらす可能性があるのかについて言及してほしかった。活動費の助成は、単に一つの研究会に対する助成が最終目的ではなく、研究会活動の活性によって、その研究分野のレベルアップを期待しているからである。